

下顎智歯部歯肉にみられた歯牙腫の一例

澤 口 通 洋 福 田 容 子 戸 塚 盛 雄
武 田 泰 典*

岩手医科大学歯学部歯科予診室

(主任 : 戸塚盛雄教授)

*岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

(主任 : 鈴木鍾美教授)

[受付 : 1987年12月17日]

抄録 : 下顎智歯部の歯肉にみられた歯牙腫の1例について報告した。患者は23歳の女性で、右側下顎智歯部の歯肉に直径約5 mmの硬組織が露出していた。口腔内X線写真では、右側下顎智歯部の歯肉に不定形の歯牙様の不透過像がみられ、その直下に埋伏した第三大臼歯が認められた。歯肉にみられた硬組織塊は病理組織学的に複雑性歯牙腫であった。

Key words : gingiva, odontoma.

緒 言

歯牙腫は象牙質およびエナメル質の増生を主とする腫瘍様病変であり、エナメル上皮腫とともに、顎骨内に生ずる歯原性腫瘍としては比較的発生頻度が高い。顎骨内に生ずる歯牙腫が経過とともに口腔内に露出することが報告されているが、このような症例はきわめてまれである。

今回、智歯部の歯肉に露出してみられた硬組織塊で、病理組織学的に複雑性歯牙腫と診断された興味ある1例を経験したので報告する。

症 例

患者は23歳の女性で右側臼歯部の冷水痛、および頬の誤咬を主訴として来院した。家族歴、既往歴、全身所見ならびに口腔内所見に特筆すべき事項はなかった。

口腔内所見で、右側下顎智歯部の歯肉に、直径約5 mmで黄白色を呈し、表面の性状が凹凸不整の硬組織が露出していた (Fig.1)。周囲歯肉は軽度の発赤を呈するものの、圧痛はなかった。歯および他部の歯肉に著変はなかった。

右側下顎大臼歯部のデンタルX線写真を撮影したところ、歯肉に露出していた硬組織は歯牙様の不透過像を呈し、この硬組織の直下に埋伏した第三大臼歯がみとめられた (Fig.2)。局所麻酔下で智歯部の歯肉に露出していた硬組織を摘出した。硬組織と歯槽骨との癒着はなく、歯肉から容易に剝離摘出することができた。なお、このとき摘出創より第三大臼歯の歯冠の一部が直視された。

摘出硬組織塊は約5×5×12mmの大きさで、軟組織の付着はほとんどなかった (Fig.3)。摘出硬組織を研磨標本として観察すると、象牙質とエナメル質とが複雑に混在しており、一部に

A case of odontoma found in the gingiva of the lower third molar.

Michihiro SAWAGUCHI, Yohko FUKUTA, Morio TOTSUKA and Yasunori TAKEDA*.

(Departments of Oral Diagnosis and Oral Pathology*, School of Dentistry, Iwate Medical University, Morioka 020)

岩手県盛岡市中央通1丁目3-27 (〒020)

Dent. J. Iwate Med. Univ. 13 : 61-65, 1988



Fig.1 Photograph (with a mirror) of the exposed hard tissue mass from the gingiva of the lower right third molar region.



Fig.2 X-ray photograph of the lower right third molar region.

わずかながらセメント質層もみられた (Fig.4a, b)。

研磨標本をコンタクトマイクロラジオグラムで観察するとエナメル質の部分は高度の不透過像を、象牙質の部分は淡い不透過像を呈していた (Fig.5a, b)。

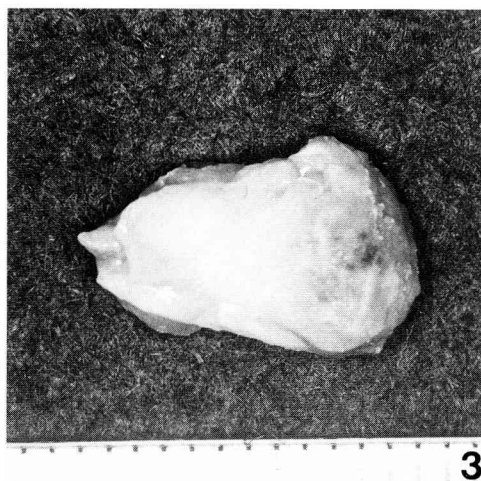


Fig.3 Macroscopic view of the extracted hard tissue mass.

考 察

顎口腔領域における歯原性腫瘍のうち、歯牙腫の発現頻度は1.6%~22%と、報告者により異なっている^{1, 2, 6, 7)}。組織型別にみると一般に集合性歯牙腫が複雑性歯牙腫を上回るといわれている^{3, 4, 10, 13)}。

歯牙腫の発生原因に関しては不明な点が多く定説をみないが、石川ら⁵⁾によると外因的には外傷や、萌出のための空隙不足による歯胚の圧迫、炎症などが考えられ、また、歯牙腫が多発して家族性に生ずる場合のあることから、内因素質あるいは遺伝子的因子が関与することも想定されている。

集合性歯牙腫は上顎前歯部に好発するのに対して、複雑性歯牙腫は、下顎臼歯部に好発する傾向がある^{1, 3, 4, 5, 9, 14)}。性別頻度については、報告者により多少の違いがあるものの男女間に明らかな差はみられないようである¹³⁾。来院時年齢をみると、若年者に多く^{8, 13)}、久野ら⁹⁾は、10~20歳代が70%を占めたと報告している。

歯牙腫は埋伏歯や欠如歯を伴うことが多く、中畑ら³⁾は、とくに複雑性歯牙腫では埋伏歯を伴う例が、伴わない例の2倍の頻度でみられたと報告している。

主訴ないし自覚症状については、腫脹、疼痛

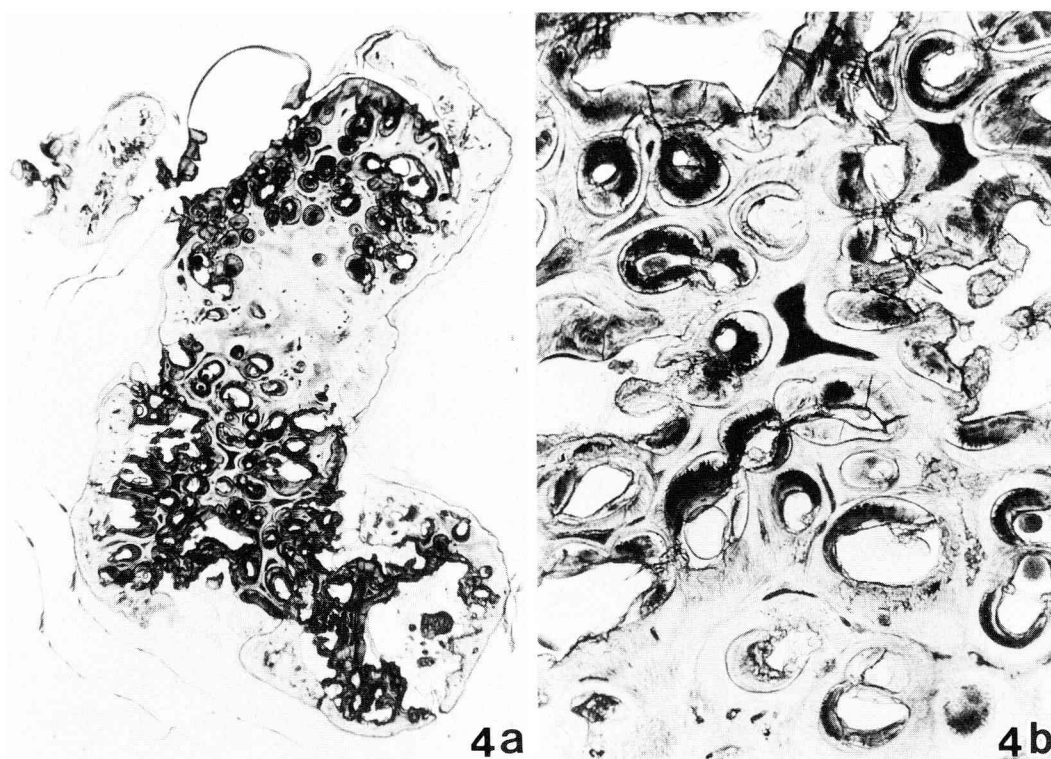


Fig.4a, b : Ground section of the hard tissue mass. (Fig.4a \times 10, 4b \times 40)

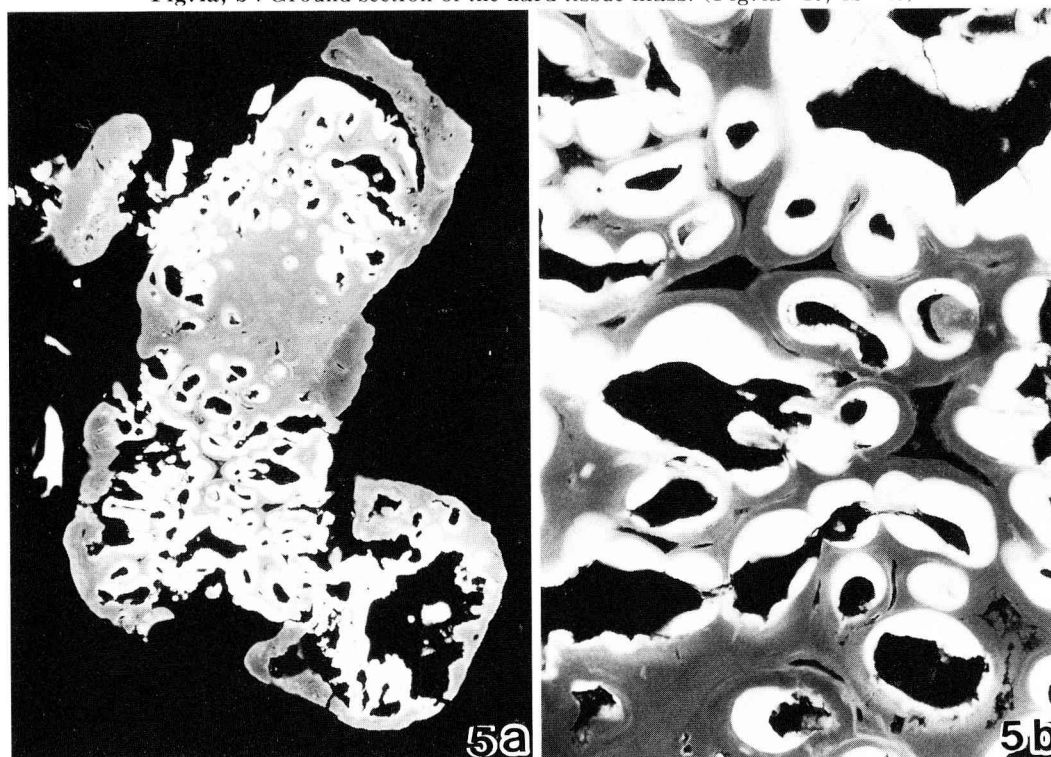


Fig.5a, b : Contact microradiographs of the hard tissue mass. (Fig.5a \times 10, 5b \times 40)

が最も多いようであり、次いで自覚症状が無く、X線写真で偶然に発見されるものや永久歯の未萌出あるいは乳歯の晩期残存などが多い¹⁻¹⁰⁾。

一方、歯牙腫が口腔内に露出してみられた症例は、塚野¹⁾が文献症例を含めた286例のなかの7例、中畑ら³⁾が、無歯顎者にみられた複雑性歯牙腫の1例、滝川ら⁷⁾が75 抜歯後約2か月後にみられた複雑性歯牙腫の1例、千葉ら¹²⁾が3年前に抜歯したD部歯肉にみられた集合性歯牙腫の1例、桜田ら¹⁴⁾が12 間に矮小歯様としてみられた集合性歯牙腫の1例、中野ら¹⁰⁾が678 欠損部の6部歯肉にみられた複雑性歯牙腫の1例などを報告している。

今回の症例では、発現部位、来院時の年齢および埋伏歯との関連については、諸家の報告と大きな違いはみられなかったが、複雑性歯牙腫が歯のように歯肉から露出し、当該部の頬の誤咬をきたした症例は、文献を渉猟し得た限りでは見い出すことができなかった。

患者が4年前に来院した際の診療録によると、

その時点の口腔内診査では右側下顎智歯部に硬組織は見られていなかった。また、最近になり同部で頬を誤咬するようになってきたとの患者の訴えから、本症例の複雑性歯牙腫は、顎骨内において埋伏智歯の咬合面上方に位置していたものが、智歯の移動に伴いしだいに歯肉側に押し出され、遂に口腔内に露出するにいたったものと思われた。

結 語

23歳、女性の右側下顎智歯部歯肉から露出した複雑性歯牙腫の1例を報告した。複雑性歯牙腫が歯肉から露出した状態でみられ、当該部の頬の誤咬の原因になった例は、これまでの報告例から見い出すことができなかった。

謝 辞

稿を終えるにあたり、御協力を賜りました、仙台市、すがの歯科医院院長、菅野博康先生に深く謝意致します。

Abstract : This paper reports a rare case of a complex odontoma found in the gingiva of a 23-year-old female.

Intraoral examination revealed that a mass of hard tissue was exposed from the gingiva of the lower third molar region. X-ray examination revealed that the hard tissue mass had a tooth-like radiopacity, and was located on the impacted lower third molar tooth. This hard tissue mass was removed surgically under local anesthesia, and was easily removed from the gingiva. The hard tissue mass was the size of a soy-bean, irregular and oval in shape and yellowish white. By histopathologic examination and contact microradiographic examination it was diagnosed as complex odontoma.

文 献

- 1) 塚野多四郎:「オドントーム」(硬性歯牙腫)の60例に関する臨床的研究, 其の1, 其の2, 大日本歯科医学会誌, 35: 39-72, 192-231, 1937.
- 2) Basker, S.N.: Synopsis of Oral Pathology, 6th ed., Mosby Co., St. Louis, p279, 1981.
- 3) 中畑範彦, 金子賢司, 川上裕永, 中村武夫, 渡辺正吾, 柴田朝美, 内堀仁一郎, 佐藤保信, 保高茂美, 柿沼平八郎, 里吉里美, 東 郁也: 本邦における歯牙腫の臨床病理学的検討, 日大口腔外科, 2: 178-191, 1976.
- 4) 豊嶋昭治, 後藤文雄, 藤井義輝, 東山隆勇, 平野隆司, 鴨川卓也, 橋本建治, 谷口邦久, 今村 実, 北村勝也: Complex odontoma の1例ならびに本邦文献(1970. 1-1983. 2)における統計的観察, 九州歯会誌, 37: 797-808, 1983.
- 5) 石川梧朗, 秋吉正豊: 口腔病理学(Ⅱ), 改訂版, 永末書店, 京都, 507-512ページ, 1982.
- 6) 浜田義彦, 篠原寿宏, 松井澄夫, 川平 淳: 歯牙腫の1例について, 日口外誌, 14: 35-38, 1968.
- 7) 滝川富雄, 高沢延幸, 飯田喜八郎, 林 裕, 中島敏之, 松本隆彦: 上顎に生じた複雑歯牙腫の2例, 日大歯学, 45: 1-7, 1971.
- 8) 加子竜一朗, 広瀬典富, 金子 勲, 小笠原祥二: 硬性歯牙腫27例の臨床的検討, 日口外誌, 17: 417-422, 1971.
- 9) 久野吉雄, 比嘉実盛, 高橋秀太郎, 本多洋之: 複合性歯牙腫26例の臨床的考察, 日口外誌, 18: 405-410, 1972.
- 10) 阿部洋子, 富澤康彦, 亀井達哉, 角田 哲, 高橋善男, 田代直也, 川村 仁, 丸茂一郎, 大村武平,

- 林 進武：歯牙腫32例の臨床的検討，東北大歯学誌，3 : 33—39, 1984.
- 11) 高久 暹，小沢重男，小守 昭：歯牙腫の臨床的観察，口科誌，34 : 489—493, 1984.
- 12) 千葉雅俊，越後成志，五十嵐隆，松田耕策，手島 貞一：興味ある所見を呈した歯牙腫の一例（会），東北大歯学誌，5 : 133, 1986.
- 13) 河野信彦，金川昭啓：歯牙腫11例の臨床病理学的検討，九州歯会誌，40 : 329—336, 1986.
- 14) 桜田正俊，山野井弘充，宮下利明，岩成進吉，大塚敬子，遠山良成，堀 稔，田中 博，工藤逸郎，佐藤 廣：集合性歯牙腫の14例，日大歯学，59 : 154—162, 1985.
- 15) 中野稔也，木下靖朗，富田陽二：下顎臼歯部に発生した複雑性歯牙腫の1例（会），日口外誌，30 : 156, 1984.